



自衛隊群馬地方協力本部

JAPAN SELF DEFENSE FORCE GUNMA PROVINCIAL COOPERATION OFFICE

予備自衛官補 13名に辞令書を交付

援護課



自衛隊群馬地方協力本部（本部長・上野事務官）は1月25日（日）、月12日付で採用された予備自衛官補13名に対して、辞令書交付式を行いました。

交付式では、本部長が辞令書を一人一人に伝達された後、宣誓を行いました。引き続き行われた本部長の訓示では、予備自衛官や即応予備自衛官の重要性など理解してもらうとともに、自衛隊という組織の重要な制度であることを丁寧に説明し、その後には自衛隊の概要、教育訓練の参加要領や予備自衛官、即応予備自衛官の処遇改善などの説明を行ったあと、予備自衛官補の方々から質問を受けました。質問は多数あり、不安が払拭されたようでした。

群馬地方協力本部は、引き続き予備自衛官補との連絡を密にして、教育訓練へのサポートをしっかりとしていきます。

中学生220人に職業講話

太田出張所



自衛隊群馬地方協力本部太田出張所（所長 3等海佐 伊藤寿伸）は2月12日（木）、太田市立竈塚本町中から依頼を受け職業講話に参加しました。当日は2年生220名に対し、自衛官、保育士、会計監査法人、音響スタッフとして働く4名の講師が学年主任の先生の司会の下、パネルディスカッション形式で職業についての様々な質問に答えました。

自衛隊からは数塚本町中を担当する金子2海曹が参加しました。海に憧れ、人の役に立つ仕事かと思い海上自衛隊に入隊したこと、やりがいや苦労話、成長したこと等を説明しました。生徒はメモを取りながら真剣に話を聞き入り、リアルなお給料事情では乗組手当の多さに驚きの声が上がりました。

生徒からは「出航時に家族と会えなくて寂しい時もありますか。」等の質問があり「寂しい時もありますが、最近の艦は通信環境が整い連絡が取れます。元海上自衛官の妻が仕事に理解を示してくれるので頑張れます。」と答えると黄色い歓声が起こりました。

金子2海曹は最後に「常に感謝の言葉を伝えること」「どんな職業に就いても誇りをもって仕事をしてほしい」と中学生にエールを送りました。

太田出張所では今後も学校等と連携し、自衛隊の仕事内容を知ってもらえるよう活動して行きます。

JR社員と予備自衛官の二足の草鞋を経験して

予備一士 下平 翔也



私は、元々大卒で航空自衛隊に入隊し、高射操作員として約一年勤務しておりました。

航空自衛隊では、入校順序のため術科学校を卒業していないので、リワードをはじめとした各種訓練をあまり経験していませんが、基地警備訓練やペトリ機材の整備など普通の社会人では経験できない日常を送り、非常に充実した自衛官生活を送れました。しかし、幼い頃からの夢であった鉄道マンになりたいという夢を叶えるため、就職活動を行い、JR東日本へ就職しました。JR東日本では、駅員としてお客様への切符の発売やお身体の不自由なお客様のご案内、遺失物（落とし物）の取扱いなどこれまでの自衛官としての生活とは関わりのない業務を担当しています。

そんな中、ニュース等で自衛隊の活躍が報道される度に、再び私も何か国民の役に立ちたいという感情が生まれました。実は、航空自衛隊を退官する際に予備自衛官の案内を受け、希望したものの僅かに勤務日数が足りず、予備自衛官に任官できなかった事もあり、悔しい思いをしていました。

そこで、改めて予備自衛官について調べる中で、予備自衛官補という制度を知り、会社にも事情を説明した上で予備自衛官補の試験を受けました。

予備自衛官補の訓練では、未経験の学生さんから社会人まで幅広い世代の仲間がいました。中には元自衛官の方もいたので、みんなと自衛官時代の経験談で盛り上がるなど楽しい訓練生活を送りました。仕事をしながらの訓練ということもあり、両立させるのに苦労しましたが職場の方々の理解もあり、順調に訓練を終えて予備自衛官に任官することができました。

航空自衛隊と陸上自衛隊では多少の違いがあるものの、今では陸上自衛隊での訓練に慣れ、89式小銃の取扱い等問題なく訓練が出来ます。予備自衛官の訓練では、長きにわたり陸上自衛隊で勤務されてきた先輩方がたくさんいらっしゃるため、部隊での出来事や辛かった訓練の話などを通じて陸上自衛隊への理解を深める良いきっかけとなっています。一方、現在は私自身が卒業して、乗務員（車掌）となる研修が続いています。車掌となるとより不規則な勤務体系となるだけでなく、実際に電車に乗務してお客様の命を守る役割が大きくなるので、二足の草鞋を履いていくことは、大変だと感じています。ですが、予備自衛官の基地警備訓練で学ぶ状況判断能力や救急法などは乗務員としても活かせると考えております。

これからも予備自衛官の訓練を通じて乗務員として必要な命を守るという知見を増やしていきたいと思っております。